

舞樂舞 能神獅子 田植え餅つき踊り

東通村民俗芸能を
楽しく観るために

東通村に代々伝え継がれた伝統芸能
郷土に根づいた芸能は時代を越えて観る人々を魅了する



能舞くのうまい

国重要無形民俗文化財（平成元年）

権こん 現げん 舞まい

権現舞は悪魔退散、五穀豊穰、家内安全など人々に幸いをもたらすための祈祷の舞です。

幼児・厄年の人などが獅子頭に頭を噛んでもらうと災難・病魔を退散させることができますとされています。

各集落で演じる時は、最終の演目となります。



上田屋



古野牛川

翁おきな 舞まい

能舞を演じる時、まず最初に演じるのが「鳥舞」「かご舞（千歳）」「翁舞」「三番叟」の四番があり、これを式舞と言ひ、儀礼の舞です。翁舞は式舞演目の三番目の演目で前段は面をつけずに重厚で落ち着いた舞で、後段は翁面をつけ、一転しておどけた舞をみせ、観客と一体となって盛り上がります。翁は観客を舞台から降りてさらい、特に幼児や低学年の児童、時には大人もさらいます。これは翁にさらわれた子供は丈夫に育つとされ、一年の無事息災を祈るとされるからです。

翁は聖なるもので、神に最も近い存在とされ、延命長寿を祈る舞です。



石持

蒲野沢



三さん 番ばん 叟そう

三番叟は式舞の四番目の演目で、各集落により演目名が「三波申吾舞」「三番」「三羽」「三婆」などとも書きます。いずれも読み音で「サンバ」と称しています。切りあごのこくじょうめん黒尉面をつけて舞います。言い伝えでは三番叟は死んで焼かれたが、翁によって生き返ります。しかし、顎の骨が見つからずひもで顎を吊しているといわれています。

三番鳥帽子をかぶり、手には白扇と錫杖をもち、軽快でテンポが早く、足拍子の美しい舞です。一度死んでよみがえったもので、天地和合の足を踏み、天の幸いをこの世に導こうとする舞です。鳥跳びや種まきの所作がみられ、五穀豊穰を祈る舞でもあります。



大利

能舞くのうまい

国重要無形民俗文化財（平成元年）

くら 鞍

ま 馬

武士舞は「平家物語」「源平盛衰記」「曾我物語」など、中世の軍記物語を題材とした演目です。

鞍馬はその中の一つで、鞍馬山の寺に預けられた幼い牛若丸（源義経）と、山伏姿に身を換えた源氏の家臣との、兵法修行の場面を演じた演目です。

牛若丸が兵法比べを挑み、刀や棒を使って闘います。やがて山伏姿に身を換えた家臣が闘いに敗れ退場し、勝った牛若丸は六方（東西南北と天地をいう）を踏んで幕に入ります。

能の演目の「鞍馬天狗」と共通するうた謡が入ります。



白糖

わた 渡

なべ 辺

渡辺は「羅生門」とも言います。源頼光の家臣渡辺綱と鬼神（茨木童子）との闘いを描いた演目です。渡辺は武士舞の基本形式を踏まえながらも、歌舞伎調の台詞劇の要素をもっているのが特徴です。前段は羅生門において、渡辺綱は鬼神と闘い腕を切り落として屋敷に持ち帰ります。鬼神が化けて腕を取り戻しに来るかもしれないので、軍蔵ぐんそうに注意するよう申しつけます。鬼神は、綱の乳母であったと偽って婆に化けて屋敷に入ります。婆は鬼神の腕を拝めば、仏様になれると噂されているので一目拝ませてほしいと口説き、綱はついに婆に化けた鬼神に腕を拝ませます。婆は突然鬼神になり、腕を持って逃げます。綱は腕を奪い返そうと六方を踏んで幕に入ります。軍蔵も続いて六方を踏んで幕に入ります。



尻労

しの 信

ぶ 夫

信夫は式舞に次いで重んじられる演目で、武士舞の中で最も古い演目とされています。

高館合戦のさまを舞っているものとされています。

信夫太郎景時が押し寄せる敵を目前にして、華々しく決戦に挑む凛々しく、勇ましい演目です。代表的な武士舞で、最初に習う演目とされています。

信夫太郎景時とは、歴史上不明の人物ですが、信夫郡は現在の福島市あたりで、信夫太郎は、信夫庄司一族ではないかとされています。



砂子又

能舞〈のうまい〉

国重要無形民俗文化財（平成元年）

すず 鈴 き 木

源義経の家臣である、鈴木三郎重家とその母との悲しい別れを描いた演目です。

武士舞の中では珍しく、母子の心情をよく描いた味わい深く、静かな演目です。

重家は、母の下を訪れ、奥州落ちする義経に従って奉公すると訴えます。母は、義経には武蔵坊弁慶や亀井六郎など優秀な家臣が多くいるのだから、行く必要はないと説得します。しかし、重家の決心は固く、引き留めることが出来ず、母は重家の死を予感しながらも、奥州行きを許します。重家の死を賭けた忠義心と子を想う母の愛情が胸を打つ演目です。舞と謡を楽しめる名曲です。



尻屋

かね 鐘 まき 巻

数多い能舞の演目の中で、ひとさわ特徴的なのが、この「かねまき」です。平安時代からある道成寺説話を題材にした演目とされています。都に隠れ無き長者の娘が、深い信仰心により女人禁制の鐘巻寺に詣でようとします。この鐘巻寺には、塀が無くても風が入ってこない、雄鹿はいるが、雌鹿は通わないなど様々な不思議がある寺です。男であれば百日の行、女であれば千日の行を経なければ、寺に入ることは許されません。娘は参詣を別当に拒絶されるが、篤い信仰心から千日の行に入ってしまう、ついにはその執心から鬼女になってしまいます。法力に優れた修験者が登場し、鬼女となった娘をおびき寄せ、五方（東西南北、中央）を浄めて鬼女を誘い出し、法力によって娘を救うという演目。修験者の法力の誇示を目的とした、修験能の特徴を最も活かしている演目です。



鹿橋

つな 綱 ひ 引 き

綱引きは、京都の三十三間堂建立の棟木引きに関わる話を題材にした道化舞です。

美しい娘が大木の根本に雨宿りし、大層立派な木であることに感心します。大木は娘に恋をしてしまいます。執心のあまり大木は枯れてしまいます。折しも、京では三十三間堂の建立が行われようとしており、人々はこの大木を棟木として献上することにし、木のひき出しをします。しかし大木はびくともしません。

おやじが綱を観客の中に出し、老いも若きも、果ては山賊までも綱をひくという演目です。観客に綱引きの協力を求め、楽屋と観客が一体となって綱をひきます。動かない大木に娘が自らの髪の毛を結わえると、大木はたやすくひかれ綱引きは観客の勝利となる筋立ての演目です。



大利

神楽 くぐら

青森県無形民俗文化財指定(昭和55年)

平 ひら 獅 し 子 し

下北地方では五十七地区で太神楽を伝承していますが、目名を師匠とするところが多くみられます。目名では、江戸時代から集落の若者の手によって太神楽を伝承しており、下北各地に師匠として出向いた記録が残されています。目名には太神楽伝説があり、いつ頃かは明らかではありませんが、師職目名権太夫が平獅子六舞を伝えたことから始まったといわれています。この目名権太夫の名前にちなんで、目名神楽と呼ばれるようになったといいます。

平獅子は正月の門打ちや悪魔払いなどに演じられ、祈祷の舞とされています。太神楽を演じる時は、幕開けに平獅子、最後に踊り獅子を舞います。



目名

踊 おど り し 獅 し 子 し

踊り獅子は「七琴調しちげんちよう」ともいわれ、南部藩お抱えの芸能集団で盛岡七軒丁御駒太夫一座が文政11年(1828)に目名に伝えたといわれています。

平獅子と比べて華やかで躍動的な場面が多く、足さばきに妙があります。



老部

拍 ひょう 子 し 三 さん 番 ば 叟 そう

神楽の演目、三番叟は現在「つきあげ三番叟」と「拍子三番叟」の二種類あります。目名地区では「種まき三番叟」という演目もあったといいます。

下北では「つきあげ」と呼ぶ手踊りがあり、これを三番叟の舞の中に取り入れた舞が「つきあげ三番叟」です。太鼓、笛、手平鉦、ツギ(拍子木)による神楽拍子でテンポ良く舞うのが「拍子三番叟」です。



下田屋

神楽 〈かぐら〉

青森県無形民俗文化財指定（昭和55年）

か な で ほん ちゅう しん ぐら こ だん め

『 仮名手本忠臣蔵五段目 』

神楽の演目の中には歌舞伎芝居があります。歌舞伎は明治になって伝わったもので「仮名手本忠臣蔵」五段目・六段目が演じられています。

特に五段目の山崎街道の段はお軽勘平物語の前半で、最も多く演じられているものです。京都に近い山崎で猿や鹿を獲って暮らす早野勘平は、大雨の降る夜、偶然同じ主君に仕えた千崎弥五郎に逢い、主君の仇討ちの費用工面を約束して別れます。しばらくすると、その街道に山賊になった斧定九郎おのさだくろうが現れ、金を持った老人を待ち伏せます。そこに勘平の女房お軽を祇園に身売りさせ得たお金の半金を持ち帰る、お軽の父与市兵衛が通りかかり、山賊の定九郎に殺されお金を奪われます。その定九郎を勘平はイノシシと間違えて射殺してしまい、暗がりであったことで誰であるか確認せず、懐のお金を持って逃げてしまいます。ここまでが五段目の物語です。六段目と続いています。



小田野沢

『 お か め ん 』

「おかめん」は狂言・道化舞の一つでしっとりとした女踊りがあり、見応えのある演目です。

神主と矢（弥）太郎左衛門と「おかめん」に坊様二名が登場し、「おかめん」が神のお告げを述べます。

滑稽なやりとりがあり、坊様たちが浄瑠璃を語る真似をして笑わせた後に、手踊り「つきあげ」を踊ってみせます。

滑稽な中にも、洗練された舞が入り、とても見応えがあります。



目名

『 坊 主 舞 』

「坊主舞」は滑稽なセリフと動作が非常に楽しい狂言の演目です。

市郎兵衛と坊主たちと女が登場し、坊主たちはそれぞれセリフを滑稽に言い合いのようなおもしろい動きをして観客を笑わせます。

途中に「道成寺の踊り」が入り、最後に女が般若に変身するという演目です。



目名



目名

獅子舞くししまい

青森県無形民俗文化財指定(平成3年)

権ごん現げん舞まい

権現舞は悪魔退散、五穀豊穡、家内安全など人々に幸いをもたらすための祈祷の舞です。

各集落で演じる時は、最終の演目となります。

舞の前半は基本の舞とされる、番楽ばんがくを含んだ下舞を舞い、後半は熊野権現である獅子頭を持って、勇壮な歯打ちをします。獅子頭は神さま(権現さま)として崇められ、神さまが仮に皆様の前に表われるとすればこのようなお姿となっているとされています。幼児・厄年の人などが獅子頭に頭を噛んでもらうと災難・病魔を退散させることができるとされています。

能舞の権現舞とは舞型や拍子が違って、さらに激しさがあります。



褒部

のごん乗げんり権現現

東通村の獅子舞は、岩手県一戸町小鳥谷から来た師匠さんぼうこうじんより伝えられたといわれています。「トラの口」「三宝荒神」など山伏神楽の特徴的な演目が伝わっています。

乗り権現は新築の祈祷「屋固め」で行われる演目です。祈祷舞が一通り終わってから舞います。権現様に手綱をかけて乗り、支配しようとします。しかし神さまである権現は思うようになりません。最後には振り落とされ、手綱をのまれてしましますが、権現は誇ったように歯打ちをする演目です。

その時代の家は天井が高く、この演目が新築時の屋固めに盛大に行われていたようですが、現在では昔のように天井の高い家は無く、舞う機会も少なくなりました。



入口

さんごう三こう宝じん荒神

獅子舞の特徴的な演目である荒神には「三宝荒神」と「トラの口」があります。

荒神は招福神ではありますが、荒ぶる神の性格を持っている崇りやすい神霊であるとされています。三宝荒神は屋内の火所に祀られている火の神で、在地のかまど神だといわれます。三宝荒神の舞は、三人の舞手が棒をくぐったり、回転したりする曲芸舞です。激しく舞っているうちに、不動明王を悟り、荒ぶる神を鎮めて災いを消滅させ、荒神の福德を呼び覚まそうとする舞です。



入口

獅子舞〈ししまい〉 青森県無形民俗文化財指定（平成3年）

『 おお かさ まつ ざん 大 笠 松 山 』

大笠松山は、問答により展開される芝居の傾向の強い演目です。物語は十和田湖奥入瀬溪谷で女盗賊となって強盗殺人を重ねた「鬼神のお松」を題材にした演目です。

白三郎が津軽から江戸に旅をする際、笠松山にさしかかります。

剣の腕のたつ白三郎は、茶屋の亀屋の主人に道を尋ね、夜道を急いで笠松山を通ります。そこへ鬼神お松が娘の姿で現れます。深夜の山中に娘がいることを怪しみますが、お松は木こりの娘だと偽り、癪^{しやく}が起こって苦しいと訴えます。白三郎は薬を与えて救い、お松に道先案内を頼みます。しかし、お松は音無川へと誘い込み、預かった白三郎の刀で背中から刺し殺します。

襲部

白三郎のせがれ千太郎が、父の敵を討つために笠松山に行きます。同じく茶屋の亀屋で道を聞き、笠松山へ入ります。お松は白三郎と同様に千太郎をだまして音無川で背負われます。千太郎はだまされたふりをし川の途中で鬼神お松であることを暴きます。千太郎と鬼神お松の戦いが始まり、途中、千太郎が刀を落とし形勢不利となりますが、父白三郎の亡霊がお松にまわりつき、千太郎が見事鬼神お松を打ち果たすという芝居仕立ての演目です。



東通の田植え餅つき踊り

青森県無形民俗文化財指定（昭和62年）

東通村の集落では、正月十五日から十六日にかけて、婦人たちが毎戸に田植え^{あねがしら}えをして歩きます。姉頭は、鳴子をつけた棒「トゴロ」をついて歩き、訪れた家の玄関先でまず田植え唄の口上を述べます。

「春の始めにお田植えに参った。とどさま、かがさま祝ってけさまい」次いで婦人たちは「正月の祝いに じゃな松の葉をば手に持ち じゃなよお あるなあ もんの花」と唄い、姉頭がトゴロで地面を摺り廻し、水田の土をならす仕草をしながら、また田植えの口上を述べます。田植え唄が終わると、その家の主人から、正月だから祝ってくれるよう頼まれ、小太鼓と手平鉦、それに唄にあわせて、小さな臼を真ん中に置いて杵を持ち輪になって餅つき踊りを披露します。餅つき踊りは通常四人で踊り、小さな臼を持つアイドリが一人、他三人は小さな杵を持ち踊ります。



目名